

第二部

メディア調査

はじめに

私たちは今日、テレビをはじめ、映画、小説、漫画など様々なメディアにおいて、警察官が登場する番組や作品を数多く目にする。フィクション、ノンフィクションを問わず、あるいは警察をテーマとする作品にかぎらず、警察官は市民社会を描くうえで不可欠な要素として、あらゆるジャンルの作品に顔を出している。岩男が1977年から1994年までの18年間（*1）に渡り、日本のドラマ番組の内容を分析した結果によれば、警察官（およびそれに準ずるもの、兵士や時代劇の岡引も含む）は、学生とならび、ほとんどの年度でもっとも頻繁に登場する職業のひとつであった。また書籍のベストセラーをみても、警察官が登場するミステリー小説が常にのトップ10を賑わわせている。

マスメディアを通じて大量に流されるこれらの警察官のイメージは、現実の警察に対する印象の形成にも、なんらかの影響をおよぼしていると考えられる。そこで、マスメディアに描かれる警察像と、それに対する受け手側の感じ方、受けとめ方について調査をおこなった。

*1 1977～94年の間に3年毎、計6回に渡り、7月14日～20日までの1週間、夕方5時から夜11時までの時間帯に主要5局で放送されたドラマを対象とし、内容分析調査を行ったもの。詳しくは、テレビ「ドラマ」の内容分析——1977～1994——（メディア・コミュニケーション No.48 p.1～56, 慶應義塾大学メディアコミュニケーション研究所, 1998）を参照ください。

1 受け手調査

メディアにおける警察像の内容分析を行なう前提として、メディアを通じて流される警察のイメージや、受け手の印象に残りやすいイメージの特徴、またメディア上のイメージと現実の警察に対するイメージとの関連性についての基礎的情報を収集するため、大学生を対象に自由回答形式で調査を行なった。

1. 方法

(1) 対象

首都圏の大学の男女学生、計89名（男性20名、女性69名）。

(2) 方法

大学の講義時間内に、集団一斉法による質問紙調査を実施した。警察に関するイメージについて自由な発想にもとづいた幅広い情報を得るため、自由回答形式の質問紙（巻末資料参照）を用いた。

質問項目は以下の通りである。

- ・ テレビドラマや映画、漫画など、マス・メディア上に登場する警察官の中でもっとも印象に残っているキャラクターとその番組・作品名。
- ・ そのキャラクターのイメージ（性格・行動の特徴など）
- ・ 現実の警察のイメージ（ドラマとの齟齬、ズレなど）

2. 結果の概要および考察

(1) 印象に残るキャラクターと作品

被験者の印象に残っている主要なキャラクターと作品は次のとおりである。

	番組名	N(人)	キャラクター / タレント
男 性	踊る大捜査線	40	青島刑事 室井管理官
	あぶない刑事	12	高山刑事 大下刑事
	はぐれ刑事純情派	9	安浦刑事
	古畑任三郎	7	古畑警部 今泉刑事
	はみだし刑事	5	高見刑事
女 性	踊る大捜査線	3	恩田刑事
	ケイゾク	2	柴田刑事
	ママチャリ刑事	2	立花刑事
	きらきらひかる	2	築山刑事
	ボーダー	1	杉嶋 (プロファイター)
			織田裕二 柳葉敏郎 舘ひろし 柴田恭平 藤田まこと 田村正和 西村雅彦 柴田恭平 深津理恵 中谷美紀 浅野ゆう子 松雪泰子 中森明菜

図表2-1-1 印象に残ったテレビ・ドラマと主なキャラクター

作 品 名	N	主役俳優
セブン	3	ブラット・ピット
ダイハード	3	ブルース・ウィルス
スピード	2	キアヌ・リーブス
バリー・ヒルズ・コップ	1	エディ・マーフィー
HA-NABI	1	北野武

図表2-1-2 印象に残った映画と主なキャラクター

作 品 名	N	主なキャラクター
逮捕しちゃうぞ (アニメ)	3	辻本 ゆき 小早川 なつみ
こちら葛飾区亀有公園前派出所	2	両津
天才バカボン	1	おまわりさん

図表2-1-3 印象に残った漫画 (アニメ) と 主要キャラクター

その他

オリコカードのTVコマーシャル 刑事プリオ 2
 京極夏彦の小説に登場する探偵 (元警察官) 1

(a) メディア別の比較

警察官が登場する作品で印象に残っているものを自由に記述させたところ、上記のように大半はテレビで放送された連続物の刑事ドラマであり、市民にとってもっとも身近なメディアであるテレビの影響力の強さが、あらためて浮き彫りになった。しかし印象に残ったテレビドラマの内訳をみるとここ1年以内に放送された番組が多く、かつての「太陽にほえろ」や「西部警察」などのように数年以上の長期にわたって放送され、放送終了後も多くの人々の記憶にとどまるような番組は少なくなった。最近のテレビ番組は放送直後のインパクトは強いものの、印象が長続きするという面ではむしろ映画や漫画の方が強いとも考えられる。また印象的なキャラクターは、テレビ以外にも映画、アニメ、漫画をはじめ小説やテレビコマーシャルなど幅広い分野に登場しており、警察官のイメージが多様なメディアに浸透していることがあらためて明らかになった。

(b) 印象的な男性キャラクターの傾向

印象に残るキャラクターは、圧倒的に男性キャラクターが多い。またその内訳をみても、男性キャラクターは、登場したメディアの種類、放送（放映、出版）時期、人種、年齢など様々な点で、女性よりバラエティに富んでいることがわかる。

前述のように、他のメディアにくらべて長期的な印象の残りにくいテレビ・キャラクターでありながら、放送終了後も長く人々の印象に残る者が存在するのも、男性キャラクターだけの特徴である。「あぶない刑事」「刑事貴族」の主人公や「3年B組金八先生」や「天才バカボン」に登場する「おまわりさん」などがその例だが、特に後者の「おまわりさん」キャラクターは、登場回数の少ない脇役であるにもかかわらず、終了後10年以上たった現在も視聴者の印象に残っている。主役級のキャラクターはその当時人気のあるタレントが演じている場合が多く、その人気も手伝って放送当時は大きなインパクトを与えるが、そのタレントが異なる役を演じたり別の目新しいキャラクターが登場すると以外に早く忘れられてしまう。すなわち主役級のキャラクターイメージは、短期間に消費され尽

くす傾向がある。その点脇役は、演じているタレントの印象は薄くても、「一風かわったおまわりさん」というイメージそのものは強固に残っており、こうした脇役キャラクターが受け手に与える影響も軽視できないことがわかる。

(c) 印象的な女性キャラクターの傾向

印象に残るキャラクターとして女性を挙げた回答者数が少ないうえ、挙げられた女性登場人物もバラエティに欠け、全体的に印象の薄い感は否めない。しかも挙げられたキャラクターはほとんどすべてここ1年以内に放送されたテレビアニメやドラマの主役で、映画や漫画、小説のキャラクターや、男性キャラクターに見られるような脇役ながら味のあるキャラクターは皆無である。

(2) 印象に残るキャラクターのイメージ

印象に残るキャラクターのイメージを概観すると、以下のパターンに大別できる。

男性キャラクター

- (a) 活動的：情熱的で正義感、カッコいい、活動的、強い、暴力的
- (b) 人情味：親身、人情に厚い、守ってくれそう（頼りになる）、やさしい
- (c) 自由奔放性：アウトロー、自由、無鉄砲、危険
- (d) 頭脳明晰性：知的、頭の回転が早い、敏腕
- (e) 明朗性：明るい、おもしろい

女性キャラクター

- (a) 非女性的：男っぽい、気が強い、意志が強い、外見に気を使わない
- (b) 頭脳明晰性：知的、頭の回転が早い、専門性、冷静、敏腕
- (c) 外見的魅力：スタイルが良い、おしゃれ、超ミニスカート

回答に挙げられたのはおおむね肯定的なイメージで、特に男性の主演級のキャラクターは、こうしたイメージパターンをいくつか兼ね備えた理想的な存在として描かれる場合が多い。中でも(c)の自由奔放性は多くのキャラクターに共通してみられ、日本のキャラクターばかりでなく、外国映画の登場人物もこのようなイメージを持つものが圧倒的に多い。警察組織の中に順応できない「アウトロー」的存在が、メディア上ではヒーロー（ヒロイン）としてもはやされる傾向があることがわかる。

また外国映画で印象に残りやすいキャラクターには、なみはずれた活動性をもつ者が多いが、裏をかえせばそれだけ「暴力的」イメージを強調したり理想化してしまう危険性も否定できない。

一方女性キャラクターの特徴をみると、男性とくらべて活動的イメージや人情味が少なく、知性または専門性や、外見的魅力を売りものとするキャラクターが多いことがわかる。

また(a)の非女性的イメージは、主演級の女性キャラクターの特徴として、もっとも頻繁に挙げられるものだ。このようなイメージの裏には、女性警官が同僚の男性と伍して働くためには、「やさしさ」「人情」といった本来の女性的な部分を切り捨て、男性以上に

「強い意志」をもたなくてはならないという背景が読み取れ、個々のキャラクターだけでなく、警察組織そのものについても依然男性社会であるという印象を与えている。

(3) メディア内のイメージと現実の警察のイメージ

現実の警察官に対するイメージ

現実社会の警察に対して抱くイメージは、すでに第1部で詳細に検討しており、ここでは自由回答を通じて得られた「生の声」の中から、特に興味深い点だけをまとめる。

警察に対するイメージは、過去の接触体験により、まったく異なっている。第1部の結果からもわかるように、警察との接触経験は「少しある」程度という市民が7割と多い。

そのため、数少ない接触体験を通じて得た印象の善し悪しが、警察全体に対するイメージを左右してしまうのだと思われる。

警察に肯定的な印象をもつ人は、実生活において交番などで実際に接触をもったとき親切にされた人や、武道や吹奏楽などの講師として継続的な関係を通じて相手の警察官の人間性に触れ尊敬するようになったというケースが多い。

一方否定的なイメージをもつ人は、自ら接触した際に不快な経験をしている人、知人・友人を通じて間接的に否定的な情報を得た人、メディアの報道やドラマを通じて汚職や犯罪を行なった警官の情報を知った人など、様々なパターンがある。

直接不快な経験をした人では、中・高校生のあるころ身に覚えのないことで疑われ、尋問をうけたり補導されそうになった経験を語る人が多い。特に女性でこういう経験をもつ人は、自分が「女性だから」そうされたという、被差別感を抱く場合が多い。たとえ不審者相手であっても対応の仕方によって差別的印象をもたれないよう、より一層配慮する必要があるのではないか。また、交番で道を尋ねたり拾得物を届けたりしたときの対応が期待どおりのものでなかったために、「冷たい」という印象をもってしまう例も多かった。特に善意で拾得物を届け出た時に、事務的に、あるいは無表情で対応をされると、「あまりいい気持ちがしなかった」「二度と届けたくないと思った」と感じる人が多いようだ。

知人・友人から得た否定的な情報には、「金と女で（罪を）見逃してもらった」「有名人には甘い」など、警察の不平等な対応ぶりに関するものが多い。根も葉もない噂がほとんどであろうが、こうしたイメージが広がると、交通規則の違反などで処罰を受けても、その原因を、自分の違法行為ではなく警察の差別的処置のせいとするような「都合のいい」解釈をし、処罰が反省につながらないケースも出かねない。市民にこうした疑いを掛けられないよう、今以上に厳格かつ平等な対応をとることが求められる。

(b) メディア上の警察官イメージと現実とのギャップ

多くの回答者が、テレビドラマをはじめとするメディア上の警官のイメージと現実の警

警察官のイメージを、はっきり区別して認識している。メディア上のキャラクター・イメージが否定的でも、「自分が会ったおまわりさんは、もっとずっと親切だった」、「(テレビほど) 暴力的な警察官はいないはず」などと解釈をしているし、逆に肯定的印象をもっていても、「現実はあるなりに簡単に事件は解決しないはず」「実際はもっと普通の人だと思う」など、冷静な見方ができる受け手がほとんどである。

しかし中には問題となるケースも散見される。特に目立ったのは、1) 現実の警察官はテレビより「暇そう」あるいは「怠惰だ」というイメージをもつケース、2) メディア上のキャラクターの誠実さと対比させ現実の警察はもっと「裏表」「二面性」があるはずと指摘するケースで、いずれも同様の回答が数件よせられている。このように現実の警察官の仕事ぶりとは乖離したイメージは、どこから生じたのか、探ってみる必要がある。

また、メディアの描く警察官はフィクションのキャラクターばかりではなく、ニュースやドキュメンタリーを通じて報道される警察官の姿も、警察のイメージを構成する上で大きな役割を果たしている。回答を概観して印象的だったのは、「報道で汚職や事件を起こした警察官の情報に接し、それまで日常の接触やフィクションのキャラクターを通じて形成していた良いイメージが一気に崩れ去った」という趣旨の答えが、数件よせられたことである。数少ないながらも犯罪を犯す警察官がいると、そのイメージは、他の様々なイメージ要因を凌駕する強い影響力をもって市民に広まり、警察のイメージを悪化させるのである。このような影響を十分認識し、市民の警察官への信頼を裏切るような警察の汚職や犯罪が起きないように、絶えず努力することが必要であろう。